

# 日本の歴史 41

伊藤雅人，前坂俊之編著（河出書房新社 ふくろうの本 2013）

## 『図説明治の宰相』

本書の請求記号 312.1 Ito

稲垣宏行

日本にとって大きな転換期の一つと言える明治時代。この時代を生き抜いてきた政治家たちに本書は焦点を当てています。

伊藤博文、山県有朋、黒田清隆、松方正義など、新政府で活躍した彼らの多くは下級藩士の出で、30代の若手でした。特に伊藤は、藩士の家へ養子に出された農民の出であったと本書は述べています。

彼らは幕末期にあつて多くの戦争を経験しました。また、西欧に留学し、海外知識も豊富に持っていたと言われています。本書はこの二つの経験が、日清・日露戦争や世界との外交交渉で大きく役に立ったと述べています。

明治維新は日本の政治機構や文化に著しい変化をもたらしました。この時代に初めて鉄道が敷かれましたが、それまで庶民層には馬による交通手段すら殆ど普及していなかったのです。徴兵制、憲法、政党、選挙制度など、江戸時代には無かった新制度も数多く導入されました。しかし、全てが様変わりした訳では無く、また弊害も少なからず生じました。

明治政府は江戸時代からの封建主義的な性質から脱却しきれず、言論や結社の弾圧という形で人権意識の低さが見られました。自由民主党の板垣退助、社会主義者の幸徳秋水、足尾鉞毒事件に抗議する田中正造など、政府に不都合な活動をする多くの人々が理不尽な咎めを受けました。政府内でも権力や利権を巡っての政争が頻発し、かつて新政権樹立に尽力した者同士が対立し合う有様でした。明治六（1873）年の政変では西郷隆盛や江藤新平らが、明治十四（1881）年の政変では大隈重信らが政府を追われました。山城屋事件や尾去沢（おさりさわ）銅山事件といった、政府首脳が関与した汚職も少なくありませんでした。

しかし、彼ら政府首脳は、日清戦争や日露戦

争などの国難や欧米から強いられた不平等条約の改正に当たっては一丸となって取り組みました。特に日露戦争は戦力差が著しく困難な戦いでしたが、東郷平八郎ら有能な軍人が善戦し、講和に当たっては第一次桂太郎内閣の意向を受けた金子堅太郎がアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトに協力を求め、辛くも成功させました。

現在、日本では福祉問題、国債や原発再稼働など経済・安全面での問題、中国や北朝鮮、ロシアなどとの外交面での問題がマスコミで頻繁に取り沙汰されています。消費税の増税や金融緩和などの政策を打ち出し、海外とも交渉に臨んでいますが、未だ芳しい成果は見えません。

そこで頼りになるのが、今まで我々が積み重ねてきた過去の歴史、とりわけ明治期の日本です。しかし、あの時代はまだ日本が先進国ではなく、それに相応しい政治機構も無かった頃です。現在の日本は既に先進国としての体を成しています。そんな伸びしろの少ない状態で、何が今の政治に求められるのでしょうか。

評者は、明治の歴史から海外での情報収集能力が目下の重要事項ではないかと考えます。様々な困難に直面しながら、経済・社会あらゆる面で貧弱だった日本を先進国の地位にまで引き上げられたのは、海外についての知識や情報を豊富に持っており、それ故に海外の動向にも柔軟に対応出来たと思うからです。前述の金子堅太郎がアメリカ大統領に日露戦争の調停協力を応じさせたのも、欧米の留学経験が豊富だったからです。その時代に合った政策は一概にこれだとは言いきませんが、やはり海外の動向をよく知っているということは、行動指針として最も妥当なのではないかと思います。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）